

IV-21

散歩道にみる「あるく道」整備に関する一考察

秋田大学 学生員 ○ 土田 祐子
 秋田大学 正 員 清水浩志郎
 秋田大学 正 員 木村 一裕

1. はじめに

近年、道路環境整備においてゆとりやうるおいのある空間、また高齢者や障害者といった交通弱者が気軽に外出できるような空間整備など身近な生活道の質的充実が求められている。本研究では歩行の中でも散歩という個人の嗜好があらわれやすい行動から選好された道に着目し、その空間の評価構造を明らかにすることから、生活道の質的向上について考察することを目的としている。

2. 研究の概要

(1) 調査の方法

散歩に利用されている道のイメージを把握するため、道の映像を用いたアンケート調査を行った。調査対象は、平成5年度に行われた散歩行動に関するアンケート調査¹⁾の結果から、秋田市内で散歩に利用されている道20ヶ所を選定した。映像はビデオカメラを高さ約1.45mに構え、日頃歩いている感覚で撮影したものを使用した。被験者は、秋田大学の学生62名（男性39名、女性23名）である。

(2) 分析の方法

散歩道としての空間評価を明確にするため、はじめに散歩に利用されている道の選好意識による分類を行った。ついで、16対の形容詞を用いたSD法の評価値により因子分析を行い、散歩道としてのイメージの把握とその類型化を行った。

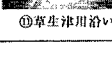
3. 散歩道・生活道としての評価

はじめに「散歩してみたい」あるいは「生活道として利用してみたい」という道について、選好意識の60%を基準として4つのグループに分類した。その分類の結果と評価に用いた道の写真を表-1に示している。

この分類によると、散歩してみたい道〔1〕、〔2〕としては遊歩道として整備されている道やふだんあまり見かけられないような道が多い。これにはある程度の緑の多さや空の広さが必要とされていて、大まかに緑に覆われている空間と空の広い空間とに分

けられる。また生活道として利用してみたい道〔1〕、〔3〕は、ふだん利用している住宅地域や商店街などの道で、ゆったりとして安全な歩行空間が確保されていることが必要と思われる。逆に散歩道としても生活道としても利用したいと思わない道〔4〕についてみると、歩行空間がきちんと確保されていない、緑が少ない、といった点が選好意識に出ているものと思われる。

表-1 選好意識別分類

	散歩してみたい	散歩してみたいと思わない
生活道として利用したい	1   ①けやき通り ②駅前緑の場   ③太平洋沿い ④御所野	3   ⑤手形山 ⑥南通り   ⑦近藤緑越 ⑧広面高田
生活道として利用したいと思わない	2   ⑨日吉坂 ⑩山王遊歩道   ⑪高清水 ⑫新奥の細道 (自然道)   ⑬新屋排水路 ⑭セリオン  ⑮草生津川沿い	4   ⑯仁井田 ⑰寺町   ⑱新奥の細道 (住宅地) ⑲蛇野  ⑳通町

4. 歩行空間のイメージについて

(1) イメージ評価について

散歩に利用されている道のイメージを把握するため、SD法の評価値により因子分析を行った。

ここでは散歩道と生活道のどちらの選好意識も高かった道①けやき通りをとり上げ、その分析結果を表-2に示している。第1因子をみると「ゆったり」

「ほっとする」「やわらかい」の因子負荷量の値が高く、これを『安堵感』と解釈した。因子の寄与率は51.2%と高い割合を示している。また、第2因子では「洒落た」「新鮮な」などの値が高くみられるため、『快活性』と解釈した。

表 - 2 因子負荷量一覧

評 価 因 子		因 子 負 荷 量	
形 容 詞 対		因 子 1	因 子 2
きびきび	- ゆったり	-0.777	-0.108
ほっとする	- どきどきとする	0.771	0.103
やわらかい	- かたい	0.733	0.087
くつろいだ	- かじこまった	0.728	-0.115
にぎやかな	- 静かな	-0.688	-0.108
古風な	- 近代的な	0.632	-0.094
冷たい	- 暖かい	-0.502	0.509
洒落た	- 素朴な	-0.250	0.772
新鮮な	- ありふれた	0.061	0.545
浪漫的な	- 現実的な	0.418	0.499
豪快な	- 繊細な	-0.387	-0.455
統一感のある	- 変化に富んだ	-0.207	0.186
平面的な	- 立体的な	0.095	-0.137
不思議な	- 明快な	0.096	-0.069
囲まれた	- 開かれた	-0.412	-0.020
雄大な	- こじんまり	0.170	-0.011
寄 与 率 (%)		51.2 %	22.0 %

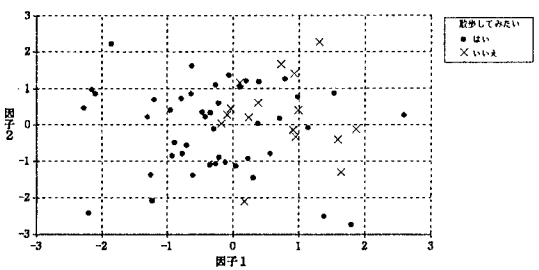
同様に20の道の因子分析の結果を表- 3 に示す。
以下にその特徴をまとめた。

- (1)安堵感-ほとんどの道にみられる
- (2)快活性-整備されている道に多い (①②④⑥⑫⑬⑭⑮)
- (3)明快さ-カラーブロック舗装されている道 (②⑩⑬)
- (4)開放性-まわりに空を遮るものがない道 (⑩⑬⑭)
- (5)浪漫的-緑によって覆われている道 (③⑤⑦⑯⑳)
- (6)情緒性-ファサードに古い建物がみられる道 (⑪⑱)
- (7)郷愁性-なつかしきを感じるような住宅地域の道 (③⑫⑲)
- (8)新奇性-あまり見かけることのない目新しい道 (④⑨⑩)
- (9)日常性-いつもと同じでくつろげる道 (⑪)
- (10)人工的-造形的につくられた住宅地域の道 (④)

表 - 3 因子の解釈

分類	No. 道名	第1因子	第2因子	第3因子
①	①けやき通り	安堵感	快活性	
	②駅前緑いの場	安堵感(負)	快活性	明快さ
	③太平川沿い	安堵感	浪漫的	郷愁性
	④御所野	人工的	新奇性	快活性
②	⑤日吉坂	安堵感		
	⑥山王遊歩道	安堵感・浪漫的	快活性	
	⑦高清水	安堵感	明快さ(負)	浪漫的
	⑧新奥の細道 (自然道)	安堵感	開放性(負)	
	⑨新厩排水路	安堵感	新奇性	
	⑩セリオン	開放性	新奇性	明快さ
	⑪草生津川沿い	安堵感	日常性	
	⑫手形山	安堵感	郷愁性	快活性
③	⑬南通り	安堵感	快活性	明快さ
	⑭近藤堀越	快活性	開放感	安堵感(負)
	⑮広面高田	安堵感(負)	快活性	
④	⑯仁井田	安堵感	開放性	
	⑰寺町	安堵感	情緒性	
	⑱新奥の細道 (住宅地)	安堵感	浪漫的	
	⑲松野	郷愁性	安堵感	浪漫的
	⑳通町	安堵感	情緒性	

次に、これらの因子と散歩してみたいという選好意識の関係を明らかにするために④けやき通りの第1因子 (Ⅰ軸)、第2因子 (Ⅱ軸) により構成される座標軸上において、散歩選好意識別に個体をプロットしたものを図- 1 に示している。この図から安堵感の因子得点の低い人に、むしろ散歩道としての選好意識が高いということがいえる。このことから「安堵感」は歩行空間の基本的な機能ではあるが、散歩として利用するにはそれだけでは十分ではなく、他の因子による影響の大きいことがうかがえる。



- (2)散歩に好まれている道について

散歩に利用されている道には「安堵感」を含む道が多くみられる傾向がある。しかし、因子分析の個体プロットでもみたように分類①、②より散歩道としての選好意識には「安堵感」だけでなく、その他の因子が大きく関与していると考えられる。そこで安堵感以外の因子についてみると道の新奇性、浪漫的など、非日常的な機能に対する評価との関わりが見出される。

5. まとめ

散歩に利用されている道の評価構造には「安堵感」が基礎にあるとおもわれる。しかし“歩きたい”という意識はそれだけで決められていないことが分かった。生活道の質としては、安全に歩けるという歩行空間の確保は必須であるが、安堵感や機能だけでなく、何らかの非日常的な要因が必要であると思われる。今後は高齢者世代など広い世代について調査を行いたいと考えている。

参考文献

1) 阿彦勝博・清水浩志郎・木村一裕(1993): 「散歩行動からみた道路の環境整備に関する考察」土木学会東北支部技術研究発表会 pp.490~491